令和5年度学校評価書

福井県立勝山高等学校

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
教育課程・学習支援	①カリキュラム・ポリシーに掲げた教育活動を実践し、客観的評価に基づいて、個人と組織でカリキュラムマネジメントを実施する。	新学習指導要領の適用、観点別学習評価の運用、カリキュラム・ポリシー（CP）に基づく学校運営の開始から２年目となり、教育活動も軌道に乗り始めているため、目標指数を今年度大幅に引き上げた。しかし、CPに沿った授業実践に取り組んだ教員の割合は89.7%で、目標指数をわずかながら下回ってしまった。一方、会議や研修に参加し授業計画再設計に取り組んだ教員は96.6%で、目標指数を上回った。いずれの数値も、昨年度と比較するとほとんど差がなく、取組には一定の成果が見られるが、全教員が同じ方向に向かって教育活動に取り組めていない点については改善が求められる。	CPに沿った授業実践と、授業改善への取組は継続して行っていくが、来年度は、生徒の探究的な学びを引き出しているか、生徒がグラデュエーション・ポリシー（GP）で示した生徒像にどれだけ近づいているかを検証する年となる。年度始めにCPやGPを再確認し、各自がそれらを意識した教育活動を計画・実践していく。また、授業改善のための研究・研修の機会を充実させることで授業力向上を図り、CPやGPの実現につなげていく。
	②授業においてICTデバイスを活用し、探究的な学び（課題設定・情報収集・整理・分析・まとめ・表現）のために活用する。	ICTデバイスの活用については、生徒一人１台のタブレット端末導入以後使用頻度が年々上昇し、全授業時数の４分の１以上で活用した教員が60.0%と目標指数に達した。一方、生徒の10.7%がICTデバイス活用について否定的な回答をしているが、これは「自ら課題を設定し」の部分に対する評価であると考えられる。ICT活用に対する満足度については、91.2%の保護者が肯定的な回答をしているが、十分な満足に至っているのはその約30%にすぎない。その原因は、ICTデバイス活用による学習状況が保護者には把握しづらいためで、そのことは、「分からない」という選択肢の追加を求める自由記述回答から窺える。	ICTデバイス活用方法は日々進化しており、学習を効果的・効率的に進めるとともに探究的な学びに資する活用方法を常に模索することが、生徒のみならず教員にとっても求められる。そのための情報交換の場を、教員間のみならず生徒と教員間でも設ける取組を進めていく。また、ICTデバイス活用状況についての情報発信の機会を増やすとともに、家庭学習でもICTデバイス活用をするような仕掛けを採り入れ、活用状況の可視化を図る。
生徒支援	①容儀を整え自発的に挨拶ができるように、全教職員の共通理解をはかり、継続的な指導に取り組む。	生徒の成果指数は95.2%（目標指数 95%以上）、保護者の満足度指数は90.6%(同 90%以上)であり、ほぼ目標を達成することができた。しかし、教職員の取組指数は93.5%(同 95%以上)とやや目標指数を下回る結果となった。これは、各クラスの代議員や生活委員が主体となり、容儀の確認を行うようになって3年が経過し、教職員が携わる場面が減少したことが関係していると考えられる。	挨拶は良好な人間関係を築く第一歩であることを理解させ、自ら進んで、学校、家庭、地域でも挨拶ができるよう集会等で周知する。また、生活委員や生徒会役員を中心に挨拶運動を復活させるとともに、生徒支援部教諭が毎朝生徒玄関で、容儀の確認と挨拶を行う。
	②生徒の人権意識や規範意識が高まるように普段から声かけを行う。	教職員の取組指数は100%(目標指数 95%以上)、生徒の成果指数は94.8%(同 90%以上）、保護者の満足度指数は88.4%(同 85%以上)で、ともに前年に比べて上昇し目標指数も上回り満足いく結果となった。	LGBTQ＋など、多様性を尊重しあう社会の確立を目指す取組が重要である。学校では、自他の生命や人権を尊重し、良好な人間関係を築き、思いやりや助け合いの心を持って行動する態度を育てる必要がある。講演会、月頭集会、学年集会などを通して、社会の一員として社会に貢献できる人材の育成を目指したい。
	③学校行事、ルールメイキングなど、生徒の自主的な活動を促す。	新型コロナウイルス感染症が５類に移行し、徐々に学校生活を取り戻すなか、教職員の取組指数は96.6%(目標指数 95%以上)、生徒の成果指数は97.6%(同 95%以上）、保護者の満足度指数は100%(同 95%以上）で、ともに前年に比べて上昇し目標指数も上回った。	生徒会が中心となり生徒自らが主体的に、新しい体操服やポロシャツを選定することができた。今後、学校祭、球技大会、遠足、ルールメイキングなどで、さらに自主的に活動できるように支援したい。
進路支援	①自らの進路について考える機会の充実と進路情報の効果的な活用を図り、主体的かつ適切な進路選択を支援する。	「面談等による生徒との意思疎通」は、昨年度に続き100%で目標を達成できた。「生徒への積極的な進路情報提供」は、昨年度より約8.4ポイント取組指数が上昇し、目標の100%に近づいている。 生徒の「面談やガイダンスを通して得た情報により、進路目標を明確に持つ」は、３年生の取組指数が92.5%で、昨年度同様目標の90%を超すことができた。１年生74.5%、２年生82.1%の指数であり学年が進むにつれて上昇しているのは評価できる。保護者の「進路に関する情報の提供」に対する満足度は、85.2%と昨年度より1.4ポイント指数が上昇したが、目標の90%までは開きがある。	生徒が、１・２年次からしっかりとした進路目標を持つために、各種模擬試験だけでなく、進路希望調査、進路ガイダンス、小論文・志望理由書指導、企業人によるキャリア教育、大学教授・専門学校講師による模擬講義、就職・公務員ガイダンスなど各種進路支援を実施している。そして今後も、時代の変化に合わせ、内容を見直し、真に生徒たちに必要なものを提供する。さらに、生徒の実態に沿うように学年会との連携を今まで以上に深める。４月初めに行った「振り返り」の重要性を伝えた学年ごとの進路ガイダンスも３年継続し、生徒たちにさらに刺激のある企画となるようにしていく。
	②模擬試験等を有効活用し、進路意識向上・学力向上に努める。	５教科担当者の「模試の事前･事後指導」への取組指標は、85.2%と目標の100%に届いていない。生徒の「模試への過去問演習や復習の取組」への成果指標も68.1%であり、目標の70%には届かなかった。保護者の「模試結果を見ての子供との話し合い」への満足度指標は、昨年より1.2ポイント増え77.7%になり、目標の80%に近づいた。	生徒が自ら、模試の過去問演習や弱点補強のための復習に取り組むように、学年会・教科と連携して意識の向上を図る。保護者と生徒は「個票成績綴り」を介して進路について話し合い、それが意思疎通の機会となっているので、今後もこの取組は継続していく。さらに、「個票成績綴り」を生徒にただ渡すだけでなく、担任・教科担任が「個票成績綴り」を有効活用していくよう働きかける。
	③生徒の進路選択に関わる自主的な活動を生徒に促す。	昨年度から設定した目標である。目標をA+Bの合計を学年を追うごとに向上させ、３年生では、90%以上とした。結果は、１年生32.1%、２年生74.4%、３年生85.8%と上級学年ほど数値は高かったが、目標には届いていない。個々には、積極的にオープンキャンパス等各種イベント、大学や地域との連携事業に積極的に参加している生徒はいるが、全校ではその数は多いとは言えない。	進路選択のためには、各自の自主的な活動こそが必要であることに気付かせる支援が必要である。進路選択の機会として学校で実施している行事をきっかけに、自主的に進路選択に対して行動できるような支援方法について具体的に検討していきたい。
保健管理	①清掃活動に積極的に取り組み、学習環境の美化に努める。	全ての観点で目標指数を上回った。生徒回答の「清掃活動に真面目に取り組んでいる。」の項目でA+Bの合計値は97.9%と、高い水準であった。普通教室がリノベーションによりきれいになったことや、ごみの分別ができるようになり、美化意識が高まったことが一因と考えられる。	日々の清掃活動については、今年度の活動を継続する。清掃への取り組み方を周知徹底させ、状況に応じて注意喚起する等、年間を通して指導していくことで校内美化を進め、満足度をより高められるよう努力する。
	②不適応やいじめの早期発見・対応と特別支援が必要な生徒への支援の充実に努める。	昨年度に引き続き今年度も、全ての観点で目標指数を上回ることができた。生徒は、「相談しやすい」が85.2%と、目標値を大きく上回り、昨年度を更に上回った。また、保護者の「相談しやすい」も83.2%と目標値を大きく上回り、昨年度より更に5.4ポイント上昇した。外部カウンセラーと協力しながら更に生徒や保護者への働きかけを進めていく。	生徒との関わり、クラス担任・学年会との連携を通して、学校生活への適応に困難さを感じている生徒の早期発見・対応に努める。特に気がかりな生徒への個別対応を充実させる。生徒には、相談室や保健室の役割について定期的に知らせていく。保護者にも、相談活動について知ってもらえるように、引き続き情報発信していく。
校外との連携・情報の発信	①総合的な探究の時間、各教科、学校行事等において、学校と地域社会等が連携した取組を実施する。	学校外との連携については、目標指数（80%）を上回る結果となった。今後も連携を高めるエ夫を続けていきたい。 総合的な探究の時間については、各学年で積極的に学校外の諸団体等と連携する活動・学校行事が行われ、担任・副担任を始めとする先生方が様々な形で携わってきた。一方で、授業研究については学校外と連携がみられる教科もあるが一部にとどまっている。教科における学校外との連携の面でも、企画の立案や更なる支援を行っていく。	総合的な探究の時間を主として、学校外の諸団体との連携を深める。探究コーディネーター―の一層の活用を進める。探究企画部と教務部が協力し、中高連携や高大連携を意識した授業研究を進める。
	②生徒自身が自分たちの状況を発信する場面を各学期、複数回設定する。	生徒が探究の成果や過程を学校外部に向かって発表する際の満足度は、86.9%が「十分に満足している」「おおむね満足している」と回答し、目標の80%以上を達成した。7月に開催された「学びの祭典」では３年生が最終発表を行い、質問や意見を交換する中で自身の学びを深めた。１，2年生は、ラウンドテーブル等で小グループでの発表の機会を重ねており、回を追うごとに自分の意見を語れるようになっている。一方で、満足していない生徒も13%程度存在している。探究活動の進行具合やファシリテーションのあり方等、今後もエ夫して発表しやすい環境を整えていく。	生徒の発表の機会は複数回確保する。ファシリテーションの技術を高め生徒が語りやすい雰囲気をつくる。総合的な探究の時間だけでなく、普段の授業や学級活動においても生徒が安心して自分の意見を述べ、それが受け入れられる環境を作るようにする。